

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三六三号)

次

人生問題と信仰……………近角常観……………(1)

愚禿親鸞……………西田幾多郎……………(8)

御一代記聞書抄(続・二)……………井上善右衛門……………(10)

私の信へのたどり……………安波勲八……………(13)

念仏詩抄……………木村無相……………(16)

池山・近角両師を憶う……………花田正夫……………(21)

目

慈光

第三十一卷 第九号

人生問題と信仰

人生とは吾人眼前の事実である。この人生をしつかりと見ずに、極表面的に見すごしたならば、その意味がすこしも解らずに、唯いたずらに食い、いたずらに寝て生涯を送るにすぎぬであらう。されど此人生を深く見る眼をもつて見たならば、この人生には味わえば味わうだけ深い意義が横たわって居るのである。

この人生を古より今に至るまで、広く世界中のものが、皆悉く日夜に経験して来たけれど、その中に、古の聖賢哲人と、其他の凡人と、大なる相違が出来たのは、この人生を深く徹底して見たと否とによるのであるが、此人生は何人も日夜眼前に見るものである。そのこれを取って問題にする人の心と、その眼孔次第でどれだけでも深い問題となるのである。而して其結果はどうかといえは、深く見、深く経験した最後に、その根底まで達する時、そこに最後のひかりに触れて、初めて人生の根本の大きな意義を見出すようになる。

世人がこの人生を考えても、未だその地盤まで達せず中途に考えを止めて置くから、或人はこの人生に対して悲哀の感をいだき、或人は此人生を無秩序の境と思うなど種々の見方が分れるのであって、これらの人は平凡な者の醉生夢死するとは異つて、この人生を問題として考へてはいるが、ただいたずらに考へるのみで、或は左に、或は右に、自分勝手にキメツケて考へて居るまでであるから、いろいろモガイても、終に其要領を得ず、煩悶の状態におちいつて、真の根底まで達しないで終るのである。

一言に人生問題といつても、その問題は実に沢山なことで、精神上の煩悶も人生問題であれば、経済上の問題も、人情のために苦しむのも、義理のために苦しむのも、正義人道を厳肅に行わんとして苦しむのもそれである。財産上の問題のために苦慮した結果、種々な主義を唱へるに至つたのも矢張りそれである。また世間によくある嫁と姑との折合わぬのも、チョツと考へれば、人生問題などと云えぬようであるが、実は家庭問題として大きな問題であつて、人生問題としては、国際問題の紛糾と同じ価値である。

かくの如く人生に関する大小百般の問題について、どこからでもきわめて行つて根底まで達したならば、つい

近 角 常 観

このように凡人の眼に映じただけの人生でなくして、確固たる地盤の上に動かざる根底を据えて来たところを、宗教の言葉では信仰というのである。なお解り易く云えば、人生とは深く見ればいくらでも深く見られるから、その人々の勝手次第に、如何ようにも色が着くというのではない。勿論見る人の眼次第で、この人生を樂しき所と見るであらう、悲しき所とも見るであらう、十人十色の見分があるであらうが、それらは一応この人生を考えた初めの段階にすぎぬのであって、それを通り抜けて、絶対の地盤まで行くと、主観的でなく、真実に最後のひかりを見ることとなる。その信仰の地盤に立つて此人生に処するときは、人生はすこぶる確固たる意義を有してゐる。この如く人生を深く穿つて信仰の光を見出して、その光をもつて人生を照らして働いて行く、これがそもそも吾人が世に処する根本意義である。

ところがそれが容易なようである、実は決して容易でない。

に信仰に帰結する。たとえば地を堀りて水を求める如くで、右からでも左からでも、遠くからでも、近くからでも、手を下して堀つていつて止まらぬならば、最後に水層に堀りあてて、同じ清水を得る如く、人生問題ほどの点からでも究めて行けば、終に信仰の水に到達するのである。しかし、未だ根底に達しない前に、色々と見解を立てて見ても、この問題の真の解決が出来るはずはない。現代世間一般に色々と人生問題が起つてゐるが、まだ最終帰結があらわれていないのは、その帰結が信仰の一点にあることに気づかぬからである。

近頃日本の思想界がすこぶる混乱を極めて居る。否前々からこの氣運が来ていたが、ことに近時世上に顯著になつて、實に一世の問題となつたのである。先頃（明治三十九年）の文部大臣の訓令は、今日の時代精神を代表したものと云つてよいと思う。他人心あり、我これを付度すといふべき有様であつたから、一世こそつてこれに賛成の意を表して居る。私も大臣の志の親切にして、その考察の真面目なるに大敬意を表するものである。然しこれは一世の憂うるところを、大臣が代表して問題にして社会に問うたと云うまでで、即ち宿題提出の声であつて、其解決を与えたのではない。この様に日本の思想界はこの人生問題を提出はしたが、これが解決をよくする

ことが出来るかどうか。もつともこの答案も汎山出ているが、どうも最後の絶対の地盤まで探りあてたものは甚だ少ないと思われる。現に一世こそつてこの問題に接しながら、この真の解答が得られぬのはまことに惜しむべきことである。

さて現代の思想界の問題を数え立てて云うことは出来ぬ。勿論大臣も漠然と、近頃何々なりと聞くという風に云われているが、要するに新聞紙上にあらわれた通り、第一に世人が段々と悲観におもむいている、真地目な人が煩悶をする。その悲観の原因は勿論同情を表すべきものばかりとは云えぬが、中には高き理想を有して居りながらも、実際には自分の信ずる通りに行うことが出来ぬために、煩悶に陥りた者がたしかにある。又多数の中にはわざと煩悶をよそおう者もあるようで、皆が皆まで真地目な煩悶者とは云えないが、いやしくも命を捨てるといふ程のものが、不真地目な者ばかりとは決して云われない。とにかく其人は真地目である。性質が真地目ながら、道徳上とか、人情上とかについて煩悶するのである。又近頃は人が柔弱に流れたというのも、青年学生が墮落したというのも、又一步進んで極端な主義を唱えるとか、或は悲哀な文学があらわれたというのも、皆この現代に於いていちじるしく顕われた現象である。是等の諸現象

に気づかず、又実際煩悶して居る者は、なおさらそれが信仰によって解けることを知らぬために、終に死に走るに至る。若し信仰によりて帰結がつくと知らしめたならば、必ず多くの人が救われるであろう。然るに人生問題の帰結が信仰にあると気づかぬからいつまでも解決の法が見出せぬのである。

信仰ということは何人も云うているが、その信仰なるものは、最も古き問題であり、又実に新らしき問題である。信仰には新信仰とか、旧信仰とかいうことはない。又自己発見の宗教というような珍らしい産物が出来るものではない。信仰は千古万古変らざる問題で、又未来永劫同じように不変の問題である。だからいつ見ても新しい生きた問題が信仰問題である。

ところがその信仰問題に関する一つの弊を云えば、古来の宗教は極めて古くからあった、而も今の我身にとりて極めて新しいということとをさとりえずに、説く者は徒らに説き、聞く者は徒らに聞くという点である。昔時は血書の写経というものがある。これは其人が信仰の上から、生ける血をもって神聖の文字を写したものである。それを今の人は空しく古物珍藏して眺めるのとどまり、生ける血をもって書いた精神に気づかぬのが多い。それと同じく古の聖賢の書いた宗教は、人生の生ける血をもつ

は、いずれもこの人生に真の光が出ぬために、内にこもって煩悶となり、外にあふれては極端な思想に走り、しておれては自殺をくだで、破れては犯罪ともなるのである。文学とてもその通りで、いかに人情をうつすのが文学であつても、徒らに煩悶を写すばかりで、人生に光を与えぬなら無用の文学である。著者自ら人生の真の意義を見出した上から筆を取つたのでなければ、真の文学の価値はない。哲学も文学と同様で、真に真地目なこと、古のギリシヤの哲人達の如く、其他古聖賢の思想の如く、人生の灯明となるべき思想が哲学であるが、今日の哲学の如き、単に理屈ばかり云うているのは真の哲学でない。其他法律であれ、国家の秩序であれ、道徳倫理であれ、真にそれを考えて行くならば、絶対の地盤に至るはずのものであつて、未だ真の根底を見出し得ないなら、未だ真個の解決が無いといふべきである。

結局、人生問題は信仰に至つて解決がつくのであつて私は現代の如き思想界を救うには信仰に限ると断言する。殊に今ここに力強く云いたいのは、現時すべての人が人生問題の解決は、信仰に帰着するといふ点に気づかぬ一事である。世の先進者と称するものは、深き同情をもつてこの不祥の潮流を救済せんとはせずに、徒らに姑息の手段を云々し、未だ信仰によつて救済すべしといふこと

て書いた宗教である、即ち釈尊なり親鸞聖人なりが、生きた人生を経験して、生きた血を以て書いた信仰である。それなのに後世にこれら聖賢の道を伝えるものは、生きた血を以て書いたものをどう見ているだろうか。墨痕の美しい珍藏すべきものであるとか、又は古人は如何にも感心なものである位に止まりて、其古聖賢の生き血が、即ち我身の血管を今現にめぐりつつある生きた血であるとか、気づかぬのではあるまいか。生きた血が黒くなつて高閣の中に束ねられた一つの古き書物であると同じことに、信仰問題も死物になつて居るのでは、人生の間に合わぬのは当然のことである。

大聖釈尊がこの人生に仏陀の光を持ち来たされた。それなのにその仏を現在多数の人は、木か金の仏像の如く考えている。法然上人が心血を注いで唱え出された南無阿弥陀仏は、真に一生の生命である。それを今日これを唱えるものは、すこぶる物淋しいもの、この人生を離れたるものの如くに思っている。道は太古に通じて、日々に新たなものであるが、この新しい方面が解つて居ない。故に現に信仰を説きながら、少しも人生に関していないのは実に残念でたまらない。

先日大阪へ行つてそちらの新聞を見たら、煩悶者、自殺者、犯罪者、等々のことが満紙にのせてある。日本の

中では東京よりも尚煩悶状態に陥っているのは大阪である。この様な所だから、宗教などはすこしも無いところであろうと思つたら、何ぞ凶らん大阪には堂々たる東西両本願寺の別院があつて、実に宏壯な建物である。かく一度は彼地の社会の煩悶を見て驚き、二たび大なる殿堂を見て驚いた。而もその殿堂では、毎日説教の絶間なく、参詣の人も堂に満ちている。このように一方には宏壯な殿堂があつて毎日説教が行われてありながら、他の一方には大きな煩悶をきわめている。これは何故かと云えば、つまるところ、その説くところが直にこの生きた人生に触れずして、唯専門的に説かれて、社会一部の人に聴かれているばかりで、現代思潮の中心に向つて信仰が出ていないからである。

宗教が人生の問題でないならいたしかたがないが、千古万古かわらぬ新しいものであるのに、それが新しい人に届かぬのは実に残念なことである。ゲーテは「人類は進歩するが人間は少しも進歩せぬ」といつている。いかにも蒸気電気等の発明のために世界は進歩したに違いないが、打てば痛く、死を思えば淋しく感ずるところの人間というものは、古今同一である。してみれば、その人生を解決するところの信仰も千古同じであるべきである。然るに何故にその信仰が生きて居らぬかと云うのに、其

要するに人生と信仰との関係は、先ず人生問題より進んで信仰に達し、而して信仰によつて人生問題を解くというのが、私の今述べるところである。これは私一人が知つたように云うのではない、勿論古往今来つねに然りである。けれど現在この事を論じている人のすべてが、皆新経験をもつて云つて居るのは間違ひである。古来宗教をもつて人生を救うてきたから、今後もその通りでなければならぬと云うだけで、自分が宗教の光を見た上で人生に活動するのでないならば駄目である。

さて人生から光を見出すという考へは、日本だけの思潮でなく、実に一世の問題である。十九世紀より二十世紀にかけての西洋の傾向もこの如くである。西洋の文学も経済も歴史も倫理もこの様な傾向におもむいている。何れも、人生の生きた問題に触れて説を立てようとして居るのが、一般の風潮である。現にトルストイ氏の非常に西洋でもてはやされるのも、人生から穿つて行つて、一代を導こうとするところが、一種異彩を放つて居るからである。このような傾向をしばらく自覚問題と名づけてよ。

顧みるに両三年の思想の潮流は、この自覚の問題に点火し來つた。所謂「無我の愛」とか「見神の実験」という風の問題である。又近頃沢山に自称の神仏などという

信仰の味を人生そのものより直接に味わずして、唯むかしのまゝを形式的に言葉通りに説くばかりであるためである。釈尊や法然・親鸞等の方々が、人生を経験された如く、自分々々が人生の上に経験して味つた信仰でない。つまり新しい酒を新しい瓶の中に盛りかえずして、古瓶のまままで持ち來つて居るからである。即ち信仰を新しい人生の上に味わぬからである。若し新しい人生に持ち來つて味わつたならば、何時でも古の聖賢の味わつた通り味わえるのであるから、どうかそつう風にも古来の信仰を、現代の人に味わつて貰いたいものである。

さて又一方に、宗教の信仰上に新しい思想を持つてかかつて居る人もある。併しこの新しいと云うている側は、果して宗教の問題として其要を得ているかといへば、惜しいかな否と云わねばならぬ。彼等は未だ絶対の光を見て居らぬ。つまりその人達が宗教問題と云うも、信仰問題と云うも、矢張り普通の人生問題と同じ地位に止まつている。これらの人は新しい信仰を案じ出し、新しい宗教を作り得べしという空想に止まつている。信仰は千古古いものが常に新しいという事実には気づかぬのである。いかに新しく説いても、真の絶対の光に達して信仰を説かなんだならば、到底人生を救うところのものにはならぬ。

ものが現われたが、他のものは例に引く程ではないが、伊藤証信とか綱島梁川とかいう人は、真面目に自分の所思を発表したのである。モウツ云うならば、私なども見神の実験とならべて、見仏の実験を説くなどと云われるが、これは誤れる批評である。然し私は彼の二氏に対しては世人以上に同情をもつてながめることが出来る。

一言に云えば、実験であるという点では、大いに注意すべき現象と私は見ているのである。このように人生問題から穿つて信仰に行かねば駄目であることはすでに明らかである。即ちいずれにしても人生で自分が苦しむことから進んで、直に信仰に入るのである。その問題は、或は道徳、或は欲望、或は人情の薄いこと、或は世の無常のこと、何事にしても人生の極に達して、遂に最後の光に達するのである。このように相對の事物から、進んで絶対の光明に触れるということは宗教の常である。禪宗の方で、如何なるか是仏、答曰、麻三斤。或は如何なるか是仏、前庭の柏樹子などというのも、恐らくはこれを云うのであらうと思ふ。とに角、人生の何物からでも導かれて、終に信仰に入れるという事を、私の実験の上から話しているのが私の平生である。

さて今ここにこの様な問題を出したについて、更に尚一つの意味がある。それは前述のように人生問題につき

あたつて絶対の光明に入るのであるが、サテそれが入つただけで終るのではない。その絶対の光でかえつて人生を照して行くという事がもっとも必要であつて、これがまた容易のようで実は非常にむづかしい。この事も近頃世人がしきりに論じているが、それにしても、多くは人生から信仰に入ったのでなくて、信仰から強いて人生をうまくやつて行こうというので、それでは信仰の味がよく解つて居らぬ。

今私の言うところは、所謂「山に入りて、復山を出す」というが如き意味で言つているのである。一例をあげれば政治も単に政治問題に止まつて、中心に信仰が無いならば真の政治ができるものでない。政治問題を穿つて行けば、結局信仰に入るべきであり、その信仰の地盤に立つて政治をする時に、初めて真の政治をすることが出来るのである。もし真の信仰が無くて、唯宗教の上より政治をせねばならぬというのでは、宗教を利用して政治をしようとするのである。又一方から宗教は政治によらねばならぬというのも同じことで、それを露骨に云えば、宗教の勢力を張ろうがために政治の力を借るといふにすぎぬ。この様に政治家は宗教を利用してし、宗教者は政治を利用してするのは、どちらも不真面目な考へであつて、断じて宗教の真意を味わぬもののごとく

たのである。彼等もなお進んで絶対の上立つたまでになつたならば、大いに見るべきものがあるであらう。要するに全く信仰の上に立つたならば、かつて信仰に入る道となつたあらゆる問題が皆解決される。即ち信仰で政治をなし、信仰で社会の問題を解き、信仰で道徳を守るにいたるのである。惜しいかな、今日多くの人生問題が、どうも信仰に達して居らぬから、たまたま真面目に人生問題について苦悶を訴えても、ただ不徹底な答へに終るの

愚 禿 親 鸞

余は真宗の家に生まれ、母は真宗の信者であるのに、余自身は真宗の信者でもなければ、また真宗について多く知つて居る者でもない。ただ聖人が在世の時、自ら愚禿と称し、この二字に重きを置かれたという話を思い出して、余の知る所を以て推すに、愚禿の二字はよく聖人の人となりを表わすと共に、真宗の教義を標榜し、かねて宗教そのものの本質を示すものではなからうか。

人間には智者もあり、愚者もあり、徳者もあり、不徳

ある。こんな意味から信仰を以て人生に働くことのないならば、それは前に論じた人生の方面に出ることのない宗教と同じで、どうしても終には無用に帰し、徒勞に終ることである。

要するに眞実に人生を自覚した上で、再び人生に活動し来るのでなければ人生に眞の味わいが出て来ない。のみならず、たとえ人生を穿つて信仰に達するといつても、眞の信仰でなければ再び人生に出て来られぬ。彼の「無我の愛」は何故倒れたかと云えば、人生の方面から進んで絶対の信仰に入りたが、その絶対から今度相對の人生に出られぬところで倒れたのである。所謂最後の光が人生の上に現われ得ぬのである。こういうことは、昔から例があつたので、宗教の古い言葉でいえば、七地沈空とか、声聞實際を証すとか云うので、すべて遁世的氣風におちいるのである。これは実を云えば、信仰から人生に出られぬのでなくして、人生から信仰に達し足らぬのである。到達してしまえば絶対だから、何時でも相對界に出られぬはずは無いのである、それが出られぬのは、其人自身はたとえ絶対と云うていても、なお眞の絶対に到達し得ない、相對的信仰にとどまつてゐるからである。

これに反して今日の種々な主義は、人生問題の上に立つてしきりに苦しんで、而もその人生の方で行きつまつたのである。

上述の様に、今日の時代は、人生問題から信仰に到るの道程である。この道行きで、或は悲觀に陥り、或は無秩序に流れんとするのは如何にも不祥事である。然しそれから信仰に入り、のち人生問題に出て来られることは、私の深く信ずるところであつて、世人が何人でもそこに入つて、信仰より出て人生に大いに働いて貰いたいのが、吾人の希望である。

西 田 幾 多 郎

者もある。しかし、いかに大きくとも人間の智は人間の智であり、人間の徳は人間の徳である。三角形の辺は、いかに長くとも、すべての角の和が二直角に等しいといふには、何の変わりもなからう。ただ翻身一回、この智、この徳を捨てたところにおいて、新たな智を得、新たな徳をそなえ、新たな生命に入ることが出来るのである。これが宗教の眞髓である。

宗教のことは、世間のいわゆる學問知識と何等の交渉

もない。コペルニカスの地動が真理であろうが、トレミの天動説が真理であろうが、そういうことはどちらでもよい。徳行の点から見ても、宗教はおのずから徳行をともない来るものであろうが、また必ずしもこの両者を同一視することはできぬ。

昔、何とかいう和尚が折角修行をしていた間は、天人が花を捧げたが、悟ってから後は捧げなくなつたという話を聞いたことがある。宗教の智は、智そのものを知り、宗教の徳は、徳そのものを用いるのである。

三角形の幾何学的性質をきわめるには、紙上の一小三角で沢山であるように、心靈上の事実に対しては英雄豪傑も匹夫匹婦と同一である。ただ眼は眼を見ることはできぬ、山中にある者は山の全体を知ることとはできぬ。この智、この徳の間に頭出頭没する者は、この智、この徳を知ることとはできぬ。何人であつても、赤裸々なる自己の本体に立ちかえり、ひとたび懸崖に手を放つて絶後によみがえつた者でなければ、これを知ることとはできぬ。すなわち深く愚禿の愚禿たるゆえんを味い得たるもののみ、これを知ることができるのである。

聖人の愚禿は、かくのごとき意味の愚禿ではなからうか。他力といわず、自力といわず、一切の宗教はみなこの愚禿の二字を味わうに外ならぬのである。

しかし右の様に云えば、愚禿の二字はひとり真宗に限つたわけでもないようであるが、真宗は特にこの方面に

と蔽の如き日蓮上人の意気は、壮なることは壮であるが、煙波渺茫、風静かに波動かざる親鸞聖人の胸懷はまたなんとなく奥ゆかしいではないか。

(註) 本稿は、明治四十四年、宗祖親鸞聖人の六百五十回の御遠忌に際し、各界の人々の寄稿をあつめ『宗

御一代記聞書抄 (続・二)

善従申され候ふとて前住上人仰せられ候。「或人善従の宿所へ行き候処に、履をも脱ぎ候はぬに仏法のこと申しかけられ候」又或人申され候ふは「履をさへぬがれ候はぬに急ぎ斯様には何とて仰せ候ふぞ」と人申しければ善従申され候ふは「出づる息は入るをまたぬ浮世なり、もし履をぬがれぬ間に死去候はば如何候ふべき」と申され候。ただ仏法の事をばさし急ぎ申すべきの由仰せられ候。

(一九八条)

着目した宗教である。愚人、悪人を正機とした宗教である。同じく慈愛を主とした他力宗であつても、ユダヤ教から出たキリスト教はなお正義の觀念が強く、いくらか罪を責めるといふ趣きがあるが、真宗はこれとちがい、絶対的慈悲、絶対他力の宗教である。有名な「蕩児帰る」の譬にあるように、放蕩息子を迎えた父なる長者のように、いかなる愚人、いかなる悪人に対しても、弥陀仏は、ただ汝のために粉骨碎身せりといつて、これを迎えられるのが真宗の本旨である。『歎異抄』の中に、聖人が「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」といわれたのがその極意を示したものであろう。

終りに、宗祖その人の人格についてみても、かの日蓮上人が、意氣冲天「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」と他宗を罵倒し、北条氏を目して「小島の主等が云々」と壮語せしにくらべて、吉水一門の念仏の法難につらなり、北国の隅に流適されながら「もし我配所におもむかずんば何によりてか辺鄙の群類を化せん、これなお師教の恩致なり」といって、法を見て人を見なかつた親鸞聖人の人格はすこぶる趣きを異にしたものといわねばならぬ。

風さけび雲走り、怒濤冲天の間に立つて、動かざるこ
祖観』なる一書が出版せられた。その中に西田博士の一文があるので、ここに御紹介しました。当時まだ京都大学の助教であられたが、最晩年の書簡に「凡夫との自覚は、仏さまの喚び声、神の叫び声、お催促である」とあるのは括目させられる名言であります。

(花田記)

井上善右衛門

小さな人間世界に生きている私どもは、この世界の常識や觀念に慣れて、それを当然の事と思ひ込んでいる錯誤が沢山あるものです。その一つが時に関する思いであります。私どもは時というものがそれ自体としてあつて、過去現在未来と連続して流れているように感じます。今日の時が延びて明日になる、時が現在を未来へと運ぶ。そうした思いで生きていますと、今日の仕事でも

明日があるからと先へ延します。そうすると思わぬ事が生じて、とうとうその事が出来なくなってしまう経験を私共はもっているものです。時に対する思い誤りについては既に一〇二条に「仏法には明日と申す事あるまじく候」と戒められ、一〇三条に「今日の日はあるまじきと思へ」と語られていることについては、かつて述べたところでありませう。

我々は現在にも長さがあるように思うのですが、一刹那の後は過去であり、一瞬の先は未来であるということになれば、現在に長さがあるわけがありません。明日があるどころか、今日さえもない。ただあるのは現在の只今のみです。現在は現在の因縁で成立し、未来は未来の因縁で成立する。花は花で散り、実は実で結ぶ。連続した時間があるのではなく、生滅する刹那々々の事物があるのみです。

その事物の変化する相状の上に仮りに時という独立したものがあつかうように人間が思う。これを唯識の教学では分位仮立といひ、我々が寿命とか方角とかがあるように考えるのも同様の性質のものであることを教えています。道元禪師の『正法眼蔵』には「有時」という一篇があり、存在と時との関係に高邁深遠な洞察が示されていますが、我々の理解の容易に及ぶところではありませぬ。しかしとにかく連続して流れる時があるかのように思っているのは架空の観念であることだけは確かです。

一期一会という言葉は、日本に生をうけた私共に親しい言葉であります。それは一生に一度の出会いということであり、現在を真に生きた現在たらしめる言葉です。それは仏法者にかぎらず、究極の真実を凝視する人には必ずやそうならざるをえない意味があります。風景画家として人の知る東山魁夷氏は幼な友達なのですが、かつてしみじみと次のように語ったことがあります。無常なるものとの奇しき出会の一時、二度と繰返すことのない触合いの瞬間、それより外に真の美の顕現する場所はない、永遠は現在の今のその中に姿を現わすと気づかされたと言った印象が忘れられません。彼もまた一期一会に生きる美の追究者であります。

三

無常を疎んじ真の時をおろそかにして真実を求めても、それは空しいことであるといわねばなりません。「ただ仏法の事をばさし急ぎ申すべきの由仰せられ候」とはその意を語られている言葉と思ひます。念仏の努力を継続して臨終の往生を期する念仏者は、まことに殊勝な人でありませうけれども、どこかに人間的な観念にわざわいされた隙間が残ってはいないでしょうか。『歎異抄』第十四章に「業報かぎりあることなれば、いかなる不思議の事にもあい、また病惱苦痛せしめて正念に住せずして終らんに念仏申すこと難し、その間の罪をばいかかして減すべきや」と申されています。

努力継続の時が臨終まで続くという保証はない。人生はもつと切迫したものです。人間の行手は誰にもわか

二 仏法は目ざめの教えです。その目ざめを求める心は自己不実気づくことに始まります。不実なるものは闇と不安の中にあり、迷いと誤謬、煩惱と苦惱とがつきものです。その不実と離れたい、解決したいと願わずにおられないのが、聞法であります。それはすでにその不実なるものが真実に喚びかけられている証拠です。その聞法者の心はおのずと真実に促され催されて来ます。悠長な時間意識が消えて、無常転変の人生の真相が強く念頭に迫ります。そうした心情が時として通途の常識に生きる人には奇異に感じられるのです。

いま或人が、善従の宿所へ訪ねて行ったところ「履はきもの」をも脱ぎ候はぬに仏法のこと申しかけられ候」とあり、「又或人」とは、その場に居合せは他の人が、それを見て驚いて、「履をさへぬがれ候はぬに、急ぎ斯様には何とて仰せ候ぞ」と問うたのも無理からぬことであつたのでしよう。それに対して善従が「出する息は入るをまたぬ浮世なり。もし履をぬがれぬ間に死去候はば、如何候うべき」と答えたのは、まことに鋭く人間の意識の盲点を指摘した言葉といえましよう。これを過剰な無常の意識と世人はいうかも知れませんが、そうでなく、時の目ざめと、無常の実感から出た自然の言葉といふべきです。この精神が現在をしてまことの現在たらしめるものではありませぬか。

りませぬ。往生決定の時を未来に托すべきではありません。弥陀の本願に遇いまつり、本願に撰取せられまいるのは、現在只今を措いては無いのです。現生正定聚、平生業成の道がなければ我々はどうして落着き得ることが出来ましよう。一度び撰取せられた身は、如何なることが起ろうが生じようが、如来の撰取不捨の中にある身なのです。

老碌すれば信心も消え失せるのではないかと不安を訴える人がありますが、然しその思いには信もまた意識と共に時の流れの中で継続するものと思つてはありませぬか。信はそのようなものでありましようか。

身体に附属する意識は老碌と共に消え失せましよう。然し信は意識が保持するものではないのです。意識を超えた絶対真実が時間の観念を破つて私の生命に入り込んで下さる事実なのです。その時最早、時間を超えた撰取の体験をえます。それは時の意識と共なる体験とは異なるものです。それを真宗の学匠は「信は非意業なり」と言われました。禪に「前後際断」というのも、こうした超時間的体験ではありますまいか。「憶念弥陀本願、自然即時入必定」とは聖人が御身の上に信の体験を語られたお言葉であります。『一念多念証文』には「即得往生」を釈されて「即はすなはちといふ、時を経す日をも隔てぬなり。また即はつくといふ、その位に定まりつくといふ語なり。得はうべきことをえたりといふ、真実信心をうれば即ち無碍光仏の御心のうちに撰取して捨てたまわざるなり」と申されています。

私の信へのたどり

安波勲 八

大正八年の求道会、夏期講習会の席上、私は近角先生に次のような質問をした。

「いつもお聞かせにあずかって、いくらよい事をしようと思っても出来ない奴を、よい事ができぬからいかぬといわれずして、出来ぬ奴を何処々々までも可愛想に思うて下さるお方があればよいと思う。さようなお方があれば私は間違ひなくたすかる、無ければ決して助からぬ事は分りました、それ故にさようなお方があればよいと思ひますが、然しそれは此方が思うだけの事で、実際にあるかないか分りません。先生はいつも左様な真実な友達があればよいと思う、それが即ち仏であつたと、其処のところを如何にも軽々と話されるが、其処が分かりません」とお尋ねすると。

「それは私の話方も悪かつたかしらぬが、話の順序として、左様なお方があればよかつた、それが即ち仏であると云つて居るので、こちらが要求するので、それ

つたので、何も話す気はしなかつた」とお話しすると、

「ちよつと待つてくれ、私は貴方のお母さんには一度も会つたことも話したこともないが、お慈悲を喜びながらやはり愚痴が出るといふと、まだ徹底してないのかも知れぬ。今君がそんな考えで別府に帰つて東陽和上の処に行くと、和上はきつと、君は近角から大変なことを聞いて帰つた。信仰に徹底してもやはり愚痴はやまんのだ、よい事は出来ぬのだ、出来ぬでもかまわぬのだと取られるかも知れぬ。和上からどんなに取られても、それは差支へはないが、信仰はそんなものではない、本当に徹底すれば愚痴も止むのだ、よいことも出来るのだ」と

と、先生はすぐに、私の問題として教えて下された。然し其時の先生のお心持が私にはつきりしなかつた。

次の日曜講話のすんだあとで

「先生、昨夕のお話は意味がはつきりしませんでした」「そうであろう。私が強く云わなかつたから分りにくかつただろう。余り強く云うと、貴方の信仰の美わしいところをぶちこわす恐れがあるから云わなかつたが、誰でも何方かに偏するものじや。若い人はよくならぬばいかぬと、よくなる方に偏し、年寄の方は悪くてもかまわぬのだとまがる。貴方はよい方に偏しておる」

が必ずあると云う事ではない。しかし自分は仏に会つて来たのだ、毎度その仏に会つた時の話をして居るのだ。そういうと君は、私は会いませんからと水掛論になるが、自分は仏に会つた話ばかりをして居るのである」

と種々お話し下さつたが、私には遂に先生の仏に会つて来たという言葉が了解出来なかつた。

どちらかに偏り易い

大正九年の二月頃、郷里の別府で開業する事になり、或晩、妻と共に暇乞のため近角先生を訪問した。其時私はなにげなく

「私の母も真宗の信者でよく寺に参りますが、矢張り愚痴をこぼす。そこでお正月に国に帰る時、先生の信仰を話して徹底させる積りで帰りましたが、さて母に会つてみると、私は僅か一二年しか聞いた事がないし、母は二三十年もお聞かせあずかつて居るので、とても私から信仰を教えるどころでなく、私より上段であ

と云われて、私はがっかりした。自分の考えでは、このくらい聞けば大分よろしいぐらいに先生から思われていると考えていたのに、よい方に偏して居ると云われて帰らなければならぬのは残念であつた。又自分の信仰の間違つて居るところは遠慮なく指適して下さればよいのに、国に帰ればまた聞く機会もないと、不平に思つたのであるが、それは大きな間違ひであつた。先生はすでに、強く云うと私の信仰をこわす恐れがあると云われているではないか。それは強く云つて下さらぬのがお慈悲であつたことに気づかせて貰つて、先生に感謝の思いをしたのは後年の事でした。

こうして近角先生の膝下をはなれて三月に別府に帰つて開業することになった。

水崎詣で

其年の盛夏、炎熱焼くが如き日、妻と共に水崎に恩師東陽和上を訪う。折しも和上は修道院にて十数名の求道者に熱心に道を説かれて居る時であつた。「修養は信仰を得て始めて進歩し、信仰は修養によつて益々円満」の言葉が今なお耳底に残つて居る。終つて刺を通ずるとすぐにあの懐しい茶の間に通して下さつた。

そこでまず大正四年の暮、東京で、科学さえ発達すれば宗教無用と和上にくつてかかつた御無札を謝し、其後の境遇の変化、思想の変化をくわしく述べ、現今の心情

を聞いて貰ってお教を乞うた。和上曰く。

「真理と仏様とは別なり、真理はひややかなり、仏様はあたたかなり。例えば、楠正成は忠臣なり、忠義は真理なり。しかも忠義を実行せる楠正成は忠臣にして生命あり。忠義は真理なり、楠正成は人格化せられたる忠義なり。この関係を詳しく理解すれば、君の信仰は一段の光彩を放つてあろう」

そこで私は、和上に別府の近くで、就いて学ぶべき善知識の推薦を乞うたところ、面倒でも此処まで来たらしらしかろうとのことで、私の水崎参りが始められた。

初めて仏に会う

自分の悪い所を見て、悪いからいかぬと云わずして、その悪い所を何処までも同情して下さるお方があれば私は助かる。なければ助からぬという事は早くから分ったが「その仏があるかないか、あれば証拠が見たい」これが二三年來の唯一の疑問であった。東京で近角先生のお話を聞いても、東陽和上のお教えを受けても、寺の説教の御縁にあうても、座談会で皆様のお話を聞いても、結局は「それでは仏はあるのか、無いのか」という疑問だけが何時も未解決のまま残された。

大正十二年の春であったと思う。或日、汚い話であるが、便所の中で、はからずも此問題が全く解決され、爾來信仰上の問題について何等の疑問もなくなったばかり

念 仏 詩 抄

ご廻向のご信心

和上おおせに

聞きざしで

安堵（あんど）の

なるのが

ご廻向のご信心じゃ

和上 禿頭誠師

聞きざしとは
聞こえのなりで
ナムアミダブツの
お呼び声が
ナムアミダブツと
聞こえのなりで
安堵のなるのが

でなく、すべての日常、實際問題についてうなづかれる様になった私はこの時、初めて仏の眞実が私にとどいたのであると信じている。

斯様な仏が確かに有ることが私に信じられた。その理由は何であるかは知らない。只然しその前後の心持を書いて見よう。

「仏が有るか無いか、証拠を見たいなんて何処を探して居たのだ。確かな証拠があるではないか、近角先生が現に安心立命の生活をしていられること、そのことが、仏の有る証拠ではないか。先生が人生問題に煩悶されていた時に、学問でも、理屈でも、何物でも解決が出来なかつたのが、仏に会われて初めて解決が出来た。仏に会われても絶対解決が出来ないならば、仏は無いのかも知れないが、絶対的解決の出来ていることが仏のある何よりの証拠でないか。近角先生が安心して居られる事については何らの疑いはない。先生の思想の全体が解ることが信仰であるとさえ考えた程である。して見れば仏のある事は間違いない。先生が「自分には仏に会って来たのだ」といわれた意味が初めて了解せられた。私もこの時初めて仏に会うことが出来た。誠に不可思議である」

木 村 無 相

ご廻向のご信心

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

いつもはなれず

和上おおせに

だんだん聞かせて

いただと

今度はマルハダカにして

親様がいつもはなれず

引いてくださるゆえ

もうじつとは

しておられぬことに

なつてしまった

マルハダカにして
マルハダカにして
助からぬものと
お知らせあつて
いつもはなれず
お助け下さるとは

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

すこしよい気が

和上お歌に

あしきには

だまされぬども

定散の

すこしよい気が

だますぞや人

わかつたから

これで

うれしいから

参れぬこの身――

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

うかれなくても

和上お歌に

いずる息(いき)

いるをまたぬと

ききながら

うかれうかれて

今日もくらしつ

うかれても

うかれなくても

いずる息

いるをまたぬの

イノチであるに

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

これと
すこしよい気が
だますぞや人

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

無理引きに

和上おおせに

ある僧いわく

臨終はありがとうなりて

参るように思いましたが

ただ

死にともないなりに

無理引きに

引きこまれるので

ござりましようか――

無理引きに

無理引きに

そつでなければ

聞く一つ

弥陀は聞いて来たれ

釈迦は聞いて行け

諸仏は聞くばかりで

往生お受けあい――

親鸞聖人

讚阿弥陀仏偈和讃に

十方諸有の衆生は

阿弥陀至徳の御名を聞き――

阿弥陀仏の御名を聞き

歡喜讚仰せしむれば――

たとい大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名を聞く人は――

聞く聞く聞く聞く

聞く一つ

ナムアミダブツを

聞く一つ

ナムアミダブツと
聞く一つ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

命がけに骨おつて

和上おおせに

「宿善のうすいものは
気持ち悪る悪る

日をおくる——

宿善あついものは

命がけに骨おつて

聞く——

命がけに骨おつて

くだされし誓願を

命がけに骨おつて

聞く——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

落ちつかせぬ

和上おおせに

「宿善の機は

何とどう言うて聞かせても

まことの信を得るまでは

落ちつかぬ

これはありがたいことじゃ」

まことの信を得るまでは

如来さまが

落ちつかせぬ

これはまことに

ありがたきこと——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ああただ一句——

和上——

最後のおおせに

七十年

何の為すところぞ

すべて

ソラゴト・タワゴトのみ

ただ一句の实在あり

南無阿弥陀仏——

ああ

「ただ一句の实在あり

南無阿弥陀仏——

ああ

ただ一句——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

以上で禿頭誠和上の仰せを終り、次回からは、香樹

院徳龍師にさせていたどうかと思っております。

今般、香師おおせに、は先般五十篇ほど出来ましたので、ボツボツ清書させていただきます、ボツボツと送らせていただきますと存じています。

早や梅雨に入りしか病みて六ヶ月

五四・六月九日。

(近信抄)

無相

……先週土曜午後退院して、丁度一週間になりますが、さすがの私もまだ緊急のご返事だけ、ハガキ三、四枚書いただけで、三十通ほど未返信のままでおります。もうムリをすると体力も視力もなく、どうかしてこの冬は入院せすにすむようにしたいと考えて、出来るだけ横になつていますから御心配なくお願いします。

……歎異抄といえは、この二ヶ月間ほど「乃至十念」について考えさせられていましたが、そのことから、第一条の「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんと思いたつ心の起る」というところを恭しくあらためておいただきして、冬扇先生の「わが身説記」が武生の一、二の本屋にも出ていました。又「念仏詩抄」が同じ書店で三十冊も売れたそう、どんな人が買って下さったのか御礼申上げたく、おなつかしく思っています云々。(五四・八月)

池山・近角両師を憶う

花 田 正 夫

私が六高時代に歎異抄を教えられて

「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」

の一句に、自分の愚悪さに行きつまっていた私をおへだてのない、広大な仏心にふれ、私の帰ることのできる故郷は、弥陀の本願一つと自然に心が定まったのである。

幸に六高に池山先生が居られて、親鸞会の催しがあった。歎異抄のお話をおきき出来た。然し「道は見えた」けれどそれが私の生活の上に力となっていなかった。

こうした生温いたどりを続けていた私に、先生は「ただ念仏のまこと」一つを、種々な機会に私共の耳に語り続けて下さったのである。そして「君方は前途の洋々とした希望に勇みきっているので、歎異抄の言葉が仲々受取り難いであろうが、耳だけ借しておくれ、そうさえておれば、何時かは、何かの機縁で、ああここであった！と大いにうなづき、聖人と同心させていただけから」とも仰言った。

ところが先生が甲南高校の丸山環校長に懇望されて招聘をうけて、そちらに転任せられた時、玉尾・北岡・山本の三君等と一緒に別れの会食に招かれた。その時、「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべしとこそ聖人は仰せ候いし云々」

の歎異抄十三章の一句を引かれて、「君方は歎異抄の集いによく出てくれたが、今度はお別れとなった。それについて、私が今後に、煩惱具足の身として業縁次第でどんな振舞をしかすかわかったものではない。そうなればみんなが呆れてしまうであろうが、こうまで仰言つて下さる聖人ばかりは、御一緒して下さるね、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とひとりことのように仰言った。

その時、私はそれを軽くおききしていたが、お別れして四年後、岡山医科大学の三年の秋、私自身が、心にうずくまる蛇心、鬼心に行き詰りきった時、この歎異抄の一句がフト心に浮かび、こうしたあさましい身を御理解

念仏、ただ念仏」と渴仰もうしている。

して下さって、どうあろうとも御一緒して下さる聖人のお心にふれて、「ああ、ありがたいな！」と、はじめて闇い心の中にひかりが射しそめてきたのである。そして念仏申させていただくようになった。

その後、私が京大の哲学科で学んでいる頃、池山先生が大谷大学のドイツ語の教授として赴任されて以来、再び先生のお導きを身近かていただけるようになった。

先生は、岡山時代から終始一貫「地獄一定の池山において、ただ念仏して」とよき人、親鸞聖人の仰せをこうむって信じているばかり」と、繰返しまき返し話して下さったのである。そして先生に接していると、自然に南無阿弥陀仏とお口からお念仏が流れていた。

昭和十三年十一月初旬に、かねて療養中であつた先生が六十七で浄土にかえられたのである。その当時、私は肺疾で絶対安静を命じられていたので、お通夜にはやっとお伺い出来たけれど、お葬儀は御無礼せねばならなかつた。

このようにしてお別れしたけれど、今までは京都まで出掛けなければお会い出来なかつた先生が、地上からお姿を消されて以来、私の内から浮かぶお念仏の中に、何時でも何処でも先生の御心に通うものを見出し、「ただ

さて近角先生のごとは、池山先生から時にふれてはお話を承っており、先生の御著書はいつも書架において、親しく拝読申していた。

池山先生が亡くなられてから、東京に近角先生をおたずねし、直接のお導きをいただきはじめた。然し、その時、常観先生はすでに中風で御不自由なお生活であつた。

お目にかかった最初に、「真宗の寺に生れて、はじめは仏教信者として立派にやらねばいかぬと思ひ、種々努力したが、結局は砕けてしまい、最後にこの身を何処々々までもお見捨てないのは弥陀一仏！といただいて今日に及んでいる。身体が悪いので、詳しくは常音から聞いておくれ」と仰言った。

応接間の柱に、先生筆の短冊に

「跡戻り、跡戻りして辿るらん、甲斐なきことに心迷いて」

とあつた。その後常音先生からお聞きすると、

「兄は中風になり、長男は蘆山で戦死し、永年信教の自由のために反対し続けた宗教法案は強行されるなど思いにまかせぬことばかりで、またしても愚痴にせずむにつけては、お慈悲にひきもどされ、ひきもどされ

て暮している。この歌は関東の聖人にゆかりの深い寺の住職が、夢の中で感得したもので兄はこれを愛唱している云々」

とのことであつた。

次に、常音先生御自身のお話を承わると、

「兄と一緒に求道会館で暮すようになり、初めは、信仰を得て兄のように立派にやつて行こうと思つて聞いていたが、それはほどなく間違ひだつた、自分勝手な願いを達成するために仏法を利用していたと気づいた。

その後、毎日曜日に兄の講話を聞き続けていたが、何度も、これで信心を得たというようなこともあつたが、すぐ崩れてしまつた。しまいには、自分は到底わからぬことと、投げやりの気持でいた。そうして三十近くになつた或日、姉から茶飲み話に、『弟がいつまでも我慢のやまぬ、あれは困つたものじゃ、可哀想なものじゃ』と兄が云つていると聞かされた。

はじめはこれを聞いて面白くなかつた。というのも、兄は信仰をもつて立派にやつてゐる、自分には信仰がないから、兄の言う通りに従つてゐるのに、我慢がやまぬとは、兄も勝手なものであると思つた。しかし、そのうちに、物の値段は買手がきめる。自分はよくし

ている積りでも兄の目にそううつるのだからこれは仕方がない。それにつけても、世間普通の兄弟なら出て行けというのに、それが可愛想である、困つたものじやと、他人に愚痴をこぼすのは、いつも気にかけてくれるからである。そこに気がつく、そのまんま、聖人のおこころに通ひ、仏のおまことを知らされて、頭

が下つたのである。

そしてはじめの間は、我慢の内容がまだつかめていなかったが、段々それが見えてきた。信仰の問題になると誰にも負けぬ信心となる、これが我慢。また分らねばいかぬ、分らねばいかぬ、これが我慢。そればかり死ぬまでというのが、我慢のやまぬ奴。以来我慢がやまぬということが忘れられず、この者が立つ瀬がないから見捨てぬということ、それ一筋でやらせて貰つておる。」

大略こうしたことをこまかに話して下された。その後、私が心臓病で蓬戸を閉じて暮しているのを心にかけて下さつて、わざ／＼滋賀県の御自坊から東京にお歸りの途中、伊恵子奥様と御一緒にお見舞に來ていただいた。その時、「将来、私の座右に掲げますことばを書きのこして下さい」とお願いすると、早速筆をとられて、

「またやりそこない、またやりそこない。それだから

お呆れないお慈悲でないか」 常観言、 常音。

と短冊に書いて下さつた。

同時に、次のように説明して下さつたのである。

「我慢のやまぬのが可愛想なものだ、困つたものじやと嫂から聞かされて、お慈悲に気づき、兄も、日曜日三十分ばかり前席で話せと云つてくれた。そこでありのままを話すと信者の方も非常に感銘して聞いて下さつた。

ところが、家内がそのままであるので、もっと真剣になれと云うと、これ以上どうしますか、と反発するようになり、家庭内に暗い影がさしてきた。又僧侶が沢山集る別院などに出掛けると、みんなが外形だけの僧にすぎぬと、こちらがへだてるものだから和合が出来ず、向うからもへだてられるという始末になつた。

このように、家庭内でも、外の生活でもさわりが重なるにつけ、色々と考えた末、兄は信仰で立派にやつてゐるのに、自分は会館に居て、かえつて信仰上の邪魔ばかりをしているので、ここを出て、生れつき玩具が好きだから、どこか場末で玩具屋をしながら暮らそうと、可成強い決心をして、兄に打ち明けた。

じつと聞いていた兄が、「なんだそんなことか！分つたといつてはやりそこない、分つたといつてまたもやりそこなう奴だからお呆れないお慈悲でないか」と云つてくれ、そんなことではいかぬ、もう一度ききな

おせとは云はなかつた」

とのことであつた。さらに

「聖人はこままでおいでとは仰言らず、いつもこちらまで来て下さる。歎異抄の九条も、唯円房に同じて下さつてゐる。こままでおいでといわれては微塵も動けぬ身だが、来て下さるお方にたすけられるのである」と話してくれた。

以上、池山先生が亡くなられてから、近角両先生のお導きをうけ、〝どこどこまでもお見捨てないお慈悲〟と絶対の大悲をくりかえしてお聞かせいただき、しかも、お見捨てないのは、こちらがやりそこないのやまぬ奴だから、と身をもつてお教え下さつたのである。ここに、機の如何を問わず、撰取して捨てたまうことのない思召しを身にしみて頂き、〝お慈悲一つで人生手放し〟のお言葉をいよいよ渴仰申すばかりとなつた。

池山先生は「ただ念仏して」近角先生は「どこどこまでもお見捨てないお慈悲」その両先生の仰せがそのままひとつと知らされ、池山先生は歎異抄二条から、近角先生は歎異抄の九条から、仏の御真実を、表裏一体になられてのお導きをうけ、生涯のよろこびにさせていただいている。

あとがき

近角先生の「人生と信仰」（明治四十一年発行）から、生活に即する意味を説いて下さった頂をいただきました。人生から信仰に入り、信仰から人生を処して行く点を詳しく教えられるものであります。

よく真宗には特別の行がないと云われませんが、念仏は煩惱生活とはなれず、その中に味わせていただくので、生活の全面が念仏の道場であります。空中には字は書けませんが、そこに紙面こそ字を書く場であるのと同様であります。「愚禿親鸞」は西田幾多郎博士が明治四十四年の聖人の六百五十回忌に際して書かれたものであります。私共の学生時代、西田先生は禅的、田辺元先生は浄土教的とよく言われたのですが、先生の上に篤信の御母堂の感化の強く働いていたことを知らされ、それが親鸞聖人讃仰の上じにしみ出ているのに襟を正さしめられました。

井上様は、聞書をとおして、我々の常識的な時の観念を破って、永遠なる時、真実な時を省みさせられました。

安波敷八氏は、東大医学部時代に近角先生から教えをうけ、卒業後別府で眼科医を開業されるに及び東陽和上の門を叩いて、

聞法と医道を完うされた人でありませんが、四十一の若さで胃癌で亡くなられた篤信の方であります。最後の言葉に「今生死敵頭に立ち過去を顧みれば、過去の経歴のすべてが、私をお慈悲に導く縁に外ならぬことを痛感する、私の一生涯は私の入信の経路に外ならぬ。今此世を去るに臨み、私の信仰上のたどりは是非つたない筆をとって書き残し、少しでも多く有縁の人々におすすめしたいと思う云々」とあるのでこの頂を掲げました。

西元様は、この夏季に、東奔西走、法縁を結んで下さっていますので、原稿は次回に下さることにいたしました。古稀の身にお障りなれと祈念しております。

木村さんは、七月末に退院、太子園で静居していられます。今回は、源通寺の禿和尚仰せの詩を終り、次回からは香樹院講師の詩を下さることにになり、もう沢山送稿して貰っております。

私にとりまして、池山・近角の両師は、勢至・観音の徳光をもっておそだて頂いたので、そうした實際をすこし書かしていただきました。これは両師をいたすらに偶像化したものではありません、直接にお提撕をいただいて、そこに仏智と仏慧を自然に感得いたしましたままであります。

△御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午后一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り。又は北山下車。地下鉄、御器所通り下車。

定価 半年 七〇〇円（送共）
一年 一四〇〇円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七